

調査団体名	NPO法人 泉京(せんと)・垂井	団体代表者名	浅野宏(代表理事)、榎本淳(事務局長) 回答者: 神田浩史(理事)
設立年	2005年11月25日	団体URL	<a href="http://sento-tarui-blog.cocolog-nifty.com/blog/">http://sento-tarui-blog.cocolog-nifty.com/blog/</a>
活動地域	不破郡垂井町1791番地1	調査員	曾我部、近藤、松井、井上、柘、西井、戸村、山崎
取材日	2011/1/24	レポート作成者	山崎真由美、西井和裕

## “幸福度の高いまち・垂井”を目指して

### <立ち上げの経緯と活動内容>

#### <立ち上げの経緯>

垂井町は、1市9町の大合併問題に住民意向調査をした結果、圧倒的多数で合併せず単独の道を選択。そこで住民参加の行財政ワークショップを開催してまちづくりを進めようとした。50名ほどの参加者は、最終的には20名ほどに減少。その動きを勉強会という形で継続していった。勉強会を重ねるうちに、勉強会では先細りになることが目に見えていたので、「住民主体のまちづくり」を象徴するものとしてNPOをつくった。

#### <活動内容>

活動内容は、当初、①まちづくり ②環境 ③防犯 の3本柱で始まった。その後、防犯は行政の委託事業を中心とする別NPOとして独立し、④人づくり(生涯学習)が加わった。「住民主体のまちづくり」を推進するための提言活動、水の調査(水質、湧水、マンボという横穴式取水口、災害時の開放井戸・ため池整備など)とマップづくり、ウォーキング、垂井お宝発見マップづくり、環境・安全教育ならびに教材づくり、NPO連携による「ぎふエコライフ推進プロジェクト」、厚生労働省の委託事業「緊急人材育成支援事業(基金訓練)」、大学連携による「都市・農村交流事業、多文化共生事業」など。

### <会のモットー(何を大切にしているか)>

#### 〇つながりをつくって広げていく

設立当初より、やりたいことを明確に持っている人が集まって活動をつくっていった経緯がある。掲げた目標に向かって戦略を立てて目指す成果を出していくのではなく、自分たちが持っているものを持ち寄り、できることを必要に応じて活かしてきた。また、NPOがネットワークしてつながり、広域で連携・協働事業を行いながら、活動の充実を図り、そのことが参加する住民の視点の広がり(揖斐川流域や岐阜県全体)にもつながっている。活動基盤の充実化に伴い、関係者が持つ外部リソースとのつながりを垂井での活動につなげ、都市と農村の交流事業に結実している。そして多様な活動が「人財育成」に収れんし、今後の泉京・垂井の方向性を示すようになってきている。

#### 〇方向性のないまちづくりは機能しない

泉京・垂井では活動開始当初からまちづくり基本条例の制定を提言してきた。昨年、ようやく条例化にこぎつけ、その中でまちづくりセンター、まちづくり協議会、まちづくり審議会を基幹制度として位置づけている。条例に記されたまちづくりセンターは「公設民営」であるにも関わらず、行政は「公設公営」を進めるなど、合意されたことへの理解力や行政能力の低さは否めない。また、NPO連携による「レジ袋」をなくす運動においても、レジ袋をなくすことが目的ではなく、その先の循環型社会の実現に向けての活動展開に向けたNPO間の合意形成に努め、頭角を現している。つながりをつくって広げていくが、そこにはぶれない明確なビジョンがある。

### <設立から現在に至るまでに変化したこと>

〇当初、垂井町まちづくりを、合併を拒否して単独で進める「垂井町内」で捉えていたが、より広域な視点で捉えるようになり、「揖斐川流域」ひいては岐阜県の広がりで見たいこうとするようになった。それに伴って広域の連携・協力をしながら活動を充実拡大してきた。また、全体の中で垂井を捉えることにより、垂井を相対化し、垂井の強みや弱み・独自性や可能性を把握した取り組みを進められるようになってきた。

〇活動を通して地域資源や泉京・垂井の存在意義が認められるようになるに従い、別の活動を通して培ってきた外部のリソースを垂井での活動につないで、他の団体にはできない、独自の活動を開拓している。泉京・垂井が開催するプログラムを名古屋市など都市部の人たちにも広報して参加を募り、垂井での活動を外に開かれたものにして、都市と農村をつなぎ、垂井が好きなの輪を広げている。そのことが、垂井町民に自分たちのまちをふりかえるきっかけにもなり、NPO理解にもつながっている。

#### 〇設立当初はなかった「人づくり」が主流になる方向性が出てきた。

生涯学習を通じた町内の人づくりから一歩踏み出して、外部者も対象にした「基金訓練」や全国レベルでの大学生の「都市・農村交流事業」を通して、泉京・垂井が人財(あえてかな?)育成の役割を担う「潜在力」が顕在化した。町民が迎え入れる側に立ち、間接的に強められる効果を有しており、泉京・垂井としては人財育成を意識した活動を進めることへの意欲が高まっている。垂井町内には外国人労働者が多く住んでおり(岐阜県内で人口比で4番目に多い)、「多文化共生事業」への着手を急いでいる。

#### <連携している団体・専門家・自治体など>

○まちづくり部門：落語イベントに関連して垂井町内の住民活動団体約20団体と。大垣落語の会、国境なき芸能団などとも連携。

○基金訓練：NPO法人 ぎふNPOセンター、NPO法人 アツマルぎふ(岐阜市)、西濃環境NPOネットワーク参加のNPOや垂井町内の「中山道垂井宿の歴史と文化を守る会」など。

○都市農村交流：西濃環境NPOネットワーク参加のNPO、上流域(揖斐川町)の製材会社のネットワーク・いびがわランバーテック、垂井町内の農事法人・ファーム岩手、大阪のNPO法人 AMネット(来年度連携予定)。

○環境部門：ぎふ・エコライフ推進プロジェクトに関しては西濃環境NPOネットワーク参加のNPO、NPO法人 ぎふNPOセンターなど多数と連携。「アースデイぎふ」では、県内の多くの事業者(主には飲食店、雑貨店など)と連携。昨年10月に開催した「アースデイいびがわ」では、揖斐川町や垂井町の事業者(主には飲食店、食材店など)と連携。環境ウォーキングに関しては、垂井町内の街角案内、歴史、観光関係のグループと連携。

○生涯学習部門：「お宝発見」は垂井町内の街角案内、歴史、観光関係のグループと連携し、岐阜県内の歴史研究者として有名な太田三郎さん(垂井町在住)や町内の歴史愛好家の協力を得ている。IT関係は、経済産業省の外郭団体JNSAと連携。多文化共生は、岐阜県国際交流センター、NPO法人 多文化共生リソースセンター東海の協力を得ている。垂井町在住のプロの日本語教師3名、ブラジル人の翻訳者の方々とも連携。また、ブラジル人、中国人研修生の受け入れ企業とも連携。

#### <今までに行った調査・研究>

○垂井町内の水環境調査：井戸、マンボ、井堰、ため池、ガマ・湧水について、歴史的な経緯から現況まで、包括的に調査。

○垂井町の委託調査で、2009年度に「(仮称)リサイクルセンター運営等調査研究業務」を実施。ごみ減量に向けての施策のまとめ、西濃各市町のごみ政策の詳細、垂井町におけるごみ施策の提言、リサイクルセンターの概略設計。これらは実施に移されず、垂井町行政内部で棚上げされたままになっている。

#### <現在直面している課題>

○住民の「まちづくり活動はNPOにお任せ」意識からの脱却

合併をせず単独でまちづくりを進める道を選んで「住民主体・住民参加のまちづくりを！」という掛け声でNPOができたのではあるが、地縁型組織、官製組織ではない形のNPO活動は経験がなく、理解しがたく、当初は警戒される傾向にあった。様々な事業展開に伴ない、理解されるようになってくると、面倒なまちづくり活動はNPOにやらせてもらえばよい、といった役割分業的な考えで、主体的に参加しようという思いが希薄になっている部分がある。改めて参加しやすいイベントを実施したり、他団体との連携を強化していく必要がある。

○いかにして若者層の参加を得ていくか

垂井町は、岐阜県内の他の市町同様、20～30歳代が他県などに流出していく傾向にある。若い世代にとって住みよいまちづくりを展開していく必要がある。その一案として、子育て支援事業も考えられる。また、幸い、様々な事業に外部から若い世代の参加があり、こうした事業を充実させて若者を対象とする経験や技量をつけ、町内の若年層の課題に取り組むことを模索している。

○大口委託事業に伴う急激な組織規模の拡大によるリスクと分社化

公共事業の委託(基金訓練)や、次年度から大学連携による都市・農村交流事業が岐阜県の委託として事業化されることから、財政基盤ができてきた。職員の補充・それに見合う事務所の拡充・移転など運営体制の確立が必要になってきている。急速な組織拡大がはらむ経営的なリスクの他に、ひとつのNPOだけが拡大していくことの弊害もある。部門別に分社化＝独立させていくことも検討して泉京・垂井の将来像を見極めなければならないところにいる。理事の中に元気な行動派が多いのは強みである。

#### <今後やってみたいこと>

- ①垂井町の水環境調査の更新と出版
- ②都市農村交流事業の汎用性のあるプログラム化
- ③揖斐川流域のエコマップ作成
- ④垂井町内での日本語会話交流会の定例化：垂井町にブラジル人・中国人を中心に1200人ほどの外国人が住んでいる。中国人は短期研修生として繊維の仕事に従事し、ブラジル人は機械関係の工場で働き、保育園には必ずブラジル人の子どもが何人かいるような状況である。
- ⑤子育て支援事業：垂井町では少数派の若い世代が抱える子育て支援に応えると同時に、多文化共生の取り組みの接点としての側面も踏まえた取り組みとして進める。
- ⑥不破郡内の間伐促進と間伐材の利活用
- ⑦地域づくり人材育成拠点としての定着化

<p>&lt;そのためにはどんな情報・人脈が必要か&gt;</p> <p>①は大阪の出版社と話はついているので、資金調達だけが課題。</p> <p>②は揖斐川流域での受け皿の多様化(森林組合や農事法人、地縁組織など)と都市部(とりわけ名古屋圏)での提携NPOの発掘。</p> <p>③は事業者・企業の詳細な情報と、連携強化。この中にはエコ商品の一種としてフェアトレードに取り組む事業者・企業、NPOなども想定。</p> <p>④は当事者(主にブラジル人、中国人)との連携強化。</p> <p>⑤は3月に大垣のNPO法人くすくすに依頼されて、初めて事業協力を行う。2年くらいをめどに垂井町が直営で行っている留守家庭事業の民営化を検討する。そのために、民間で実施されている団体や民間委託している自治体の情報、国の子ども・子育てプランなどの情報が必要。</p> <p>⑥はまずは垂井町内の林地の現況把握、提携相手を見つけるところから。加えて、間伐材利活用を促進している団体、個人の情報、連携が必要。</p> <p>⑦は垂井町内での恒常的な宿泊施設の把握。これは、活用可能な空き家のリストアップから手をつける。加えて、情報発信の強化。単にホームページを充実させるといった点だけではなく、地域づくりや都市農村交流に取り組む団体などとの連携が不可欠。</p>	
<p>&lt;神田さんの描く展望&gt;</p> <p>一見、バラバラに見えるかも知れませんが、機軸は揖斐川流域の流域圏構想の促進。その中でも二次支流・相川流域での取り組みを中心に据えています。したがって、②、③を進めていくことで、自ずと⑥、⑦へと進展していくことを想定しています。</p> <p>もう一つは、住民主体の取り組みの促進。④と⑤は密接につながっています。行政の制度は、子育ては血縁で、という前提で成り立っているため、ブラジル人の方々だけでなく、血縁などない私たち他所者にとっては、非常に使い勝手が悪いものです。行政に改善を求めるよりも、自分たちでつくっていく。行政力の弱さを逆手にとって、です。これは、リサイクルセンター棚上げや、条例で公設民営を規定しているまちづくりセンターを平気で公設公営(当初だけという点ですが)で発足させるという、行政力の弱さに対して、多くの住民の方々は愚痴を言うだけで終わっているため、少しずつ住民主体の取り組みを可視化し、住民の主体性、自律性発揮の機会を増やしていきたいと思っています。</p>	
<p>&lt;チームオリジナルの質問&gt;</p>	
質問内容:	<p>①垂井は水に恵まれた肥沃な土地柄。農業支援あるいは農業に関連する活動をしているのか？</p> <p>②なぜ垂井町に定住することになったのか？</p>
答え:	<p>①</p> <p>○農事活動には関心があり、泉京・垂井として体験農場を試みましたが、少人数で多忙を極めている状況下でやりきれなかった。</p> <p>○不当に低い生産者米価に困っている農事法人に対して、私的レベルでお米の販売に少し協力している。本格的に取り組むには、NPO法人としての関わり方の検討や、JAとの関係など、しっかりした準備が必要である。</p> <p>②</p> <p>夫婦の活動地域の間差点で、比較的安い住居費という条件から垂井に偶然住むことになり、交通の利便性の高さと水の良さ、自然環境、歴史、文化に恵まれていることが気に入っていた。そこに所秀雄さん(農地法をつくり、近代養鶏の父といわれた人。ガットウルグアイラウンド反対運動の文章には接していたが、合併問題学習会で出会った)が住んでおられるということで、永住を決定した。また、これまで世界水フォーラムやそのNGO事務局の運営を任せられたり、琵琶湖・淀川や桂川流域の水の調査に関わり、森林組合や地縁組織との話し合いを重ねてきた経験があり、伏流水豊かな農山村・垂井に魅力を感じたことも理由の一つである。</p>
<p>&lt;その他、調査団体からのメッセージ&gt;</p> <p>常にグローバルな流れを見据えながら、10年、20年先を見越して、できることを一つずつ、流域を単位に積み上げていきたいと思っています。これを契機に、ぜひ、関係されている皆さまから助言、協力、連携などをいただけると幸いです。</p>	



理事の神田さん



泉京・垂井の事務所

<執筆者の感想(心に残ったこと)>

これまでグローバルな国際援助の取り組みや日本政府への提言活動など、マクロの視点や経験が、将来的に垂井町での地域に根ざした活動に活かされる日が必ずやくるであろうことを期待する。

また、「水の取り組み」に関しての専門性が高く、垂井町の豊かな「水」を巡る文化と融合してさらなる深化・進化を期待したい。

泉京・垂井の活動は、これまでの活動を通して蓄積された、特に若い世代のネットワークが活かされている。神田さんの個人的魅力に引かれて集まる若い世代の存在は貴重である。【山崎真由美】

垂井町は旧中仙道と揖斐川支流・相川の流域に開けた小規模の、歴史と伝統のある町だが、多様な背景を持った人々が暮らしている。古くからこの町で暮らしてきた人々、結婚や仕事などを機に他の地域から移って来た人々、アジアからの移住労働者。大まかにはこの3種類の人々だ。文化的に多様な人々が暮らしているという意味では岐阜や名古屋などの大都市圏と変わらないが、多様な人々がそれぞれの立場を認め合いながら、相互に助け合う関係性をつくることを目指したまちづくりに取り組んでいる点で、大都市にはない特徴が見られる。その活動を先駆的に引っ張っているのは、「つながりをつくって、広げていく」というモットーを掲げる泉京・垂井であり、他の地域から移り住んできた神田さんのような新来者たちが活動の中心にいる。新しいものと古いもの、従来からあるものと外部からもたらされたもの。これらが融合するところに何か面白そうなことが起こりそうなワクワク感がある。【西井和裕】